

## 室谷賢治郎先生の人と学問

久 木 久 一

室谷賢治郎先生は生れは札幌、北海道で育った生粋の道産子である。中学を出ると笈を負い東都に学び、東京商科大学第一回の卒業生として同期の南亮三郎先生とともに、卒業後直ちに本学の前身小樽高等商業学校に教鞭をとられることとなり、先生の学者としての生活はここから始まったのである。ときは大正12年の4月、それから昨年10月末本学を去られるまで40幾年、一貫して本学にとどまり子弟の教育に専念され、先生の生涯の殆んどを捧げて来られたのである。

先生が本学在職中は教務部長として、あるいは図書館長としての重職を果され、昭和24年本学が単科の商科大学として発足するにあたり、当時の大野純一学長を助けて本学の礎えを築かれた功労者であり創設者の一人でもある。望まれて退職後札幌短期大学々長として就任され、札幌商科大学の開設のため努力されている。今日往年の元気と意気を取戻し捲土重来の気概に燃える先生の念願が一日も早く達成されんことを心から希うものは、あえて筆者一人ではあるまい。

先生はまた多趣味な方であって、和歌を作り音楽を解し運動に興味をもたれ、まことに人間味豊かな幅の広い学者でもある。折に触れ機に乗じ一首をものにしてわれわれに示されるが、その即意軽妙、人をして胸をつかしむるものがある。そしてそれらは一括して近いうちに先生の歌集として出版されることになっている。さらに先生は宝生流の謡曲をよくされ、生来の美声は聞く者をして恍惚たらしめる。謡曲できたえられた先生の音声はまた格別大きいことも有名で、教室での講義で窓の外の蟬の鳴声を黙らせたという逸話さえある。先生の運動熱心もまたひとしおである。ラクビー部や野球部の部

長として学生の指導にあたり、毎年行なわれる北海道大学との対抗試合での選手への激励振りは、選手をして振るい立たしめたものである。今もなお、対抗試合毎に先生のお顔を見ないことはない。

先生の記憶力はまた抜群であり、経済史家として名著をものされたせいでもあるまいが、たまたま古い卒業生に話が及ぶと、彼は何年の卒業で学校では何をやっていたという具合に一人一人をよく覚えておられて説明されるので、まったく驚きの外はない。

室谷先生の学問について、洩れ聞くところにしたがい語るとすれば、中央を離れた遠い北海の地に経営学の牙城をうち建てられ、北海道には室谷賢治郎先生が居ると、経営学創成期の一大先覚としてうたわれて来た学者である。

わが国で経営学の名を冠する文献も数少なく、学会でも企業論争や方法論争の華かな頃、先生の『経営経済学概論』が世に問われたのは昭和10年である。これは「経営経済学」と銘をうった文献としては古典の一つに数えられている。先生はその著書の序に「著者が始めて斯学を担当して講壇に立った時には、邦書にて経営経済学の名を冠したものは一つもなかった。従って著者は、あるいは企業論就中企業形態論を紹述し、あるいは米国流の配給組織論を解説し、時に独乙流の経営学に傾き、時に英国流の産業管理論に拠り、右顧左眄自己の体系の容易にならざること少なからず、悶々の情を懐いて居った」と述べられ、そして「偶々文部省より在外研究を命ぜられ独乙に留学するや、彼地における学者の間にも定説と称すべきものなき事実を覩て、仮令体系の未だ成らざるにせよ、一応自己の歷程を止めて置くことの無意義ならざるを感じ」て世に問われたという。そしてこの本は、当時多くの文献が方法論や企業または経営の概念規定に終始している時に、その内容として、第一章 文献史的序説、第二章 研究の対象と方法、第三章 経営の形態、第四章 企業の形態、第五章 準企業の形態、第六章 企業の結合、第七章 金融、第八章 労務、第九章 配給 として、経営学の内容について一つの

型を示したもので、これは同先生が各国の文献を渉獵しつつ総合化と体系化に努められ、独自の体系を示されたもので、学会では一つの道標に値いするものとして賞賛の辞がおくられている。

また文献史的序説で、斯学の米英における発達の二節は、当時未だ何人も筆にしなかったところであり、英国のロバートソン (P. S. Robertson) およびフローレンス (P. S. Florence) の所説に及んでいるのは後進学徒にとって貴重な示唆となったといわれ、米国経営学の研究方法として所謂「ケース・メソッド」Case Method に言及し、「実地の討究の成果は事業の根底に潜む一般原理を帰納する」研究態度を明らかにした点は、論者の好んで引用するところとなった。

さらに経営学の対象を論ずるに当って、「経済性と収益性の意義」を明快に論じ、経済性をもって生産経済のみの原理とすることには賛同し得ぬとして、消費経済をも含むという主張は異色ある議論として注目され、また収益性はかかる経済の結果を展示するものとして両者を区別し「経営経済上必要なのは金融経済的収益性」である点を指摘されて、学会の論争に一石を投ぜられたのである。

先生は後に『商業史大綱』（昭和13年）や『経済史新講』（昭和17、18年）を世に問われただけあって、本書における企業形態論は圧巻ともいうべく、個人企業、人的会社および資本会社の歴史的な発展を辿りながら、それぞれの本質的な特徴を明確にされた点は他にこれを見ることができない。

同書の金融は、今日の経営財務論または財務管理論に相当しているが、「資本の調達」の節では企業の評価の問題に触れ、「単に事業開設の当初のみならず、事業の継続せられる毎期の決算」についても重要であるという見解は、「インフレーションと企業の評価」なる論文にも取上げられ、別にものされた『経営金融論』（昭和10年）とともに、まさにこの問題についての当時の第一人者である。労務の章でもアメリカ経営学の成果を剩すところなく取り入れられ、その賃銀管理や組織論は今日においてもなお一読に価するも

のがある。

また同書は、ドイツにおける商業学の後退、経営経済学の抬頭というなかで、生産活動を重視する余り、販売や配給の入りこむ余地のない時期に、配給の一章を設けて配給活動を経営学の一分野として位置づけられたのは、先生をもってはじめてとする。

要するに、先生の経営経済学は、ドイツ経営学の体系とアメリカ経営学の成果とを総合し、新しい体系として打ち出されたもので、経営学濫觴期における一つの金字塔として評価されるものといわねばならない。

昭和4年商業学及び文明史の研究にドイツに留学し、ベルリン大学ではGottl-Ottlilienfeldに師事して経済学の指導を受け、帰朝されてからの先生のご活躍と学問は、その著『経営経済学』を通じて紹介すると以上の通りであるが、今後も先生がいつまでもご健康で後輩のご指導に当られんことを心から祈念してやまない。